

右浅大腿動脈の STENT 内再狭窄病変の治療方針決定に血管内視鏡が有用であった 1 症例

症例は 60 歳代女性、1 週間前より増悪する間欠性跛行の精査目的に当院に入院となった。下肢動脈造影を施行すると 6 か月前に右浅大腿動脈に対して留置された金属ステント(S. M. A. R. T. 6.0 mm x 150 mm, J&J, Cordis)が完全閉塞を来たしていた(図 a)。引き続き血管内治療 (EVT: endovascular therapy)を左大腿動脈より対側アプローチにて施行した。ワイヤー通過後に吸引カテーテルにて吸引を施行し大量の血栓を認めた。その後血管内視鏡を用いて血管内を確認した。ステントの中央部は混合血栓を認めたが(図 c, d)、ステントの両端部付近は新生内膜増殖による器質狭窄を認めた(図 b, e)。これらの所見を参考にし、治療方針としてステント内は血栓溶解療法とし、ステント両端には新たにステントを追加留置した。翌日の血管造影では、良好な血管開存が確認された(図 f)。浅大腿動脈のステント内再閉塞症例に対して血管内視鏡が治療方針決定に有用であった一例を経験したので、文献的考察を踏まえ報告する。

